

## 文学博士鈴木幹也君の『エンペドクレス研究』 に対する授賞審査要旨

主文 本書は断片として遺されたエンペドクレスの二つの作品『ペリ・ピュセオス（自然について）』（ディールスの断片集、一——一一）と『カタルモイ（浄め）』（ディールスの断片集、一一二——一四七）との関係を論じたものである。この兩著作は、前者が自然学風の哲学詩であるのに対して、後者は神話風の教訓詩であって、両者の性格にかなりの差異があるのみならず、内容的にも『カタルモイ』で扱われている輪廻転生の主体である「ダイモーン」が『ペリ・ピュセオス』ではその占めるべき位置をもたないという根本的不一致がある（但し断片五九の示すごとくダイモーンという語は『ペリ・ピュセオス』の中にもある。鈴木、第五章第一節）。そのため、両著の関係を解明することが、エンペドクレス理解の根本課題となっているのである。

著者は関連ある断片のすべてにわたって、言語的考証をも含めて、詳細な吟味・検討を行ない、従来公にされたほとんどもすべての研究文献を渉猟して、次のごとく結論する。即ち『ペリ・ピュセオス』における「四根」（火・空気・水・土）の「愛憎」による変転（鈴木——転生）と、『カタルモイ』における「ダイモーン」の転生との間に、或る対応関係が認められるということを指摘し、この特色ある見解に基づいて、兩著作が結局、同一の原思想を異なる相手に向けて説いたものであると解釈するのである。著者は同じ研究態度で、これと関連ある二、三の重要な（実は本論

全体に係わる)問題をも、「補遺」〔I-X〕として取扱っている。

現在ではただ断片的に(約一割程度)しか残っていない古代の著作の処理という困難な問題に、正面から取り組んだ著者の努力は、高く評価されねばならぬであらう。また、ソクラテス以前の哲学に関する本格的な研究としては、これほど精細なものは本邦にはかつてなかったと言つてよい。

エンペドクレス(紀元前四九五/四九〇年から四三五/四三〇年)の生涯はほぼ著者も叙述しているところであるが、哲学者としての彼には、『自然について』と『カタルモイ』という何れも韻文で書かれた二つの書があったとされているが、従来日本において主として問題とされたのは、前者にとどまっていた観がある。タレスは、アルケー即ち根本物質をもって水であるとし、アナクシメネスは空気であるとし、ヘラクレイトスは火であるとしたが、エンペドクレスはこれらにさらに地を加えて、所謂四元論がその成立をみた。この四元論はアリストテレスによって継受され、中世の自然学をも支配したものである。しかし彼はさらにこれら四元或いはむしろ彼の語をもってすれば四根の結合と分離とによって生成を説明せんとしたが、このさいの結合と分離とが愛(ピロテースまたはピリア)と憎(パイネイコス)とによって成立するとみた。これは彼が質料因のほかに運動因或いは動力因をも設定したことを意味する。そうして結合に関しては、彼は結合の割合(ロコス)を重んじ、この割合に諸物の本質があるとして形相因をも承認したが、この「結合の割合」という点で、彼はピュタゴラス派から影響されていたものと思われる。実に断片一二九に「知恵の最も豊かな富をわがものとした人」とあるのは、けだしピュタゴラスのことを指していたであ

ろう。またさらに彼が生理的心理学を愛と憎との両原理によつてたてようとした考え方は、今日のフロイトにおける所謂サイコ・アナリシスに継承されている。

普通に哲学史あるいは思想史においてエンペドクレスの功績としてあげられる諸点は以上のごとくであるが、これ等は殆どすべて『自然について』という書に見られるところである。これに対して『カタルモイ』のほうは著しく趣を異にしたものであつて、ダイモーンの輪廻転生について、

「私はこれまで かつて一度は少年であり 少女であつた、

藪であり 鳥であり 海に浮び出る物言わぬ魚であつた……」

(断片一一七 藤沢訳、鈴木、三三四頁)

とある語は極めて有名である。またこの書は要するに純愛のカタルモス(カタルシス)に徹することによつていと高きにあるアイテール(ガスリー)のうちに住む不死なる神々として甦り得べきことを説くものとして、著しく倫理的宗教的であつて、自然学として基本的には物活論的、さらには唯物論的なるように見える『自然について』とは著しく趣を異にするものである。したがつて、エンペドクレスの哲学思想に関して従来主として重んぜられていたのは、『自然について』だけであると言つても過言ではなく、少なくとも戦前の日本においてはそうであつた。

ところで前世紀において最高のギリシヤ哲学史家であつたツェラーは、両書の間には断絶のあることを主張した

が、これはけだし『自然について』のみを重んずる態度と基本的には同一歩調をとるものであったと思われる（ツェラーはヘーゲルの哲学史講義に従ったものと思われる。但し、かく『カタルモイ』を切り捨てるのも哲学史観のいかんによることでもある）。

しかるにその後、ハインツェ、ディールス（鈴木の「引用文献」参照）等が両書間の関連の有無について論じてから、今世紀の七〇年代に至るまで、この問題について論ずる数多くの研究者が現れた。著者はこのさい、ヴィラモーヴィツ・メレンドルフ、ガスリー、オプライエン等三六人の学者の諸説を、ツェラーの一八四四年の見解、バーネットの一八九二年の見解、ハインツェの一八九二年の見解にはじまる四一項目に分けて論じ、さらにこれ等の見解を、両作品の関連を拒否する見解と両作品の並列的間接的な関連を認める見解と両作品の重層的直接的な関連を認める見解という三種類にまとめ、そうして著者自身はダイモンを四根に対応させることによって、両作品間の重層的な直接的な関連を主張している。

両書の関連は以上のごとくであるが、両書間の差異に関しては、著者は『自然について』のほうは、断片一の示すごとく、唯一の愛弟子であった医者のパウサニアス——アンキトスの子——に与えた自然学形式のものであるのに対して、『カタルモイ』のほうは、断片一一の示すごとく、故郷のアクラガスにおけるオルフェウス教団、或いはエンペドクレス教団（同時に医師の団体でもあった）に与えた書であるとしている。そうして著者は両書ともエンペドクレスがペロポネソス半島、特にオリンピアの町に亡命していた時の書（但し、『カタルモイ』については、著者は南イタリヤでの執筆の可能性をも認めている）であるが、ただ『自然について』のほうは彼の逝去により近いもの

であると考えている。なお著者は、『自然について』のほうが四根の円環的循環、或いは憎の支配する半円と愛の支配する半円とからなる円環を主軸とするものとして時間的であるのに対して、『カタルモイ』のほうは罪のゆえに地上に顛落していたダイモーンが天上の瀨気（こゝろまき）（アイテール）に住む神々に生れ変わり得ることを説くものとしてむしろ空間的であるとしている。

結語　我が国にはソクラテス以前のギリシヤ哲学に関する独創的かつ本格的な研究は、未だ皆無に近い状態であるが、本研究は、この領域においても欧米の研究者に比して敢えて遜色のない研究の我が国における出現を意味するものである。ことに学問的な『自然について』と著しく神話的な『カタルモイ』との間に内面的連関を見出し、後者をもって前者のアレゴリー（アレゴリヤ *speaking otherwise* 諷諭——鈴木、四〇七頁）とみたのは、プラトンにおける「ロゴスとミュトス」との関連の問題が、プラトンに先立って既にエンペドクレスにもあったことを示唆するものである（『創文』二二六〇号における鈴木照雄氏の評論）。